

## 子宮がん検診（車検診）

### 動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から開始され、県下市町村からの委託事業として当協会が配車し、細胞診断と結果広告を担当している。検診は県下の北里大学・東海大学・横浜市立大学・聖マリアンナ医科大学・日本医科大学武蔵小杉病院の産婦人科の医師が担当し、この5大学と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」で、精度管理・向上に努めている。

細胞診判定法が平成21年度よりベセスシステム準拠日産婦医会分類に改定された。採取器具も平成23年4月より綿棒からCervex-Brush Combiに変更した。

### 子宮頸がん検診結果

過去4年度連続の増加傾向からやや後退した昨年に比べ、少し持ち直した。年齢階級別では、やはり60歳代が最も多く、次いで40歳代、30歳代と50歳代の順で、従来とほとんど変わらない。期待された30歳未満の受診者は昨年より少し少ない799名、3.3%だった。40歳未満では20.0%である。一方、初診者（初めての検診受診者、7,706名）率は31.9%を占め、昨年の33.9%を下回った。うち若年者の割合は30歳未満8.2%、30歳代27.9%で、昨年とほぼ同様だった。

要再検・精検率では、細胞診LSIL以上（旧分類クラスIIIa以上）の要精検者は0.58%（139名）、ASC-US（クラスII再検）などによる要再検者は0.87%（210名）だった。昨年ではそれぞれ0.38%、0.70%だった。両者合わせた要再検・精検率は1.44%で、昨年の1.08%、一昨年の1.17%に比べ、増加していた。再・精検の実施率は平成24年8月末の集計時点で86.53%、うち精検者84.17%、再検者88.10%で、例年通りの高い水準だった。

要再検・精検者の再検・精検結果は表4-6の如くである。発見癌のうち頸癌は20例（上皮内癌11例、Ia期1例、Ib期以上2例、病期不詳1例、腺癌5例）で、早期癌の頻度は60%で、昨年の77.8%より低かった。頸癌発見率は0.08%と例年の0.05%を上回った。初診者からの頸がん発見率は0.12%と高く、一方、再診者（検診受診経験者）のそれは0.07%と低かった。20例の頸癌は全て要精検群から発見されている。年齢階級別では、本年度は30歳未満から癌は発見されなかった。初診者での癌発見率では、最も高い発見率が昨年度は40歳代から30歳代に若年化し0.43%と高かったが、本年度は40歳代で0.24%と最も高く、30歳代で0.14%だった。初診者の多い30-49歳の若年者で高い頸がん発見率であることに

は変わりがない。なお、70歳以上で上皮内癌が1例発見されている。

発見された異形成は99例（軽度49例、中等度29例、高度21例）である。異形成発見率は0.41%で、昨年の0.32%より高い頻度となった。初診者の、異形成の発見率は0.79%と一層高く、年齢階級別では30歳未満2.22%、30歳代0.70%、40歳代1.13%を示し、若年初診者に高かった。しかし、50歳代でも0.29%、60歳代0.36%を示していた。再診者からも、異形成は0.23%の高頻度で発見され、とりわけ20歳代0.60%、30歳代で0.64%、40歳代では0.55%と高い頻度だった。繰り返し受診者であっても異形成の発見頻度は低くないことを銘記していきたい。

細胞診判定ASC-USを中心とする結果のため要再検となった者209名から、36例（発見率0.14%）の異形成（軽度23例、中等度10例、高度3例）が発見されている。なお、本年度要再検者から、癌の発見はなかった。

子宮頸癌以外の癌では、体癌が1例発見された。

### 評 価

以上、本年度に実施された検診は、適正に処理される実績を示した。

若年者の受診は予想に反して微増に止まっており、30歳未満では3.3%、40歳未満でも20.0%であった。20、30歳代の若年者では異形成や頸癌の発見率が高いところから、若年者の子宮がん検診受診が一層勧奨される。

子宮頸癌ならびに異形成の発見率は初診者に高いことはこれまでの統計通りであり、未受診者への受診勧奨に一層努めたい。一方、再診者での癌発見率は著しく低下するものの、異形成の発見率は0.23%と高率を示していることから、再診者へも定期的な検診受診の継続が勧奨される。

一昨年度から開始された子宮がん検診無料クーポン券は、若年者での検診受診の掘り起こしと高頻度の癌や異形成の発見に貢献していた。本年度も配布されたが、継続性に期待される。

細胞診報告様式が、ベセスシステム準拠の日産婦人科医会分類に改訂された。要再・精検の頻度が上昇した原因として、ASC-USなど新しい分類によるとの意見がある。今後の検証が必要であろう。

新しい採取器具では不適正例の減少が期待されるが、出血を訴える頻度の増加が危惧される。パンフレットの配布などを通して受診者の疑念を除去するよう努めている。

関係の集計表は94頁に掲載